

験、合格し、同月末慈山駅へ日給一円十銭で駅手として採用された。数年後、雇員試験、車掌試験などに、合格し、平壤列車区順安駅に勤務し、鉄道業務に精励したのである。

昭和二十年八月、終戦後は幾多の身の危険に遭遇したが、一年間ソ連軍の労務作業に従事し、二十一年九月、引揚げ途中多くの苦難を乗り越えて、懐かしの故郷へたどり着いた。

引揚げ後は幸いにも、運輸省の出先機関へ日雇労働者として採用された後に、傭人、雇員、事務官へ昇任し、酒田、新潟と勤務して、昭和五十三年四月、三十三年度の公務員生活に別れを告げたのである。

退職後、五十四年十月から遊佐町選挙管理委員会委員に選任され、在任中委員長へ選出され、町行政の一機関の責任者として重責を痛感し、粉骨碎身職務に精励したのである。誠意を持って勤務する態度は広く信望をあつめている。

(前引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

北鮮脱出記

埼玉県 嵐末 稔

一、生い立ちの記

(一) 大連での出生

私の父はシベリア出兵、第一次世界大戦と青春時代のほとんどを、中国及びシベリアにおける軍務に服し、除隊後も夢を滿蒙の地に託し、昭和の初め以来、関東州大連市（現在の中国東北部の大連）に居住し、満州国建国のために微力ながら尽くしていたようである。どのような組織に所属していたかは父の口から聞いたことはないが、当時、満州の地方に点在していた馬賊の帰順工作に従事していたようである。私は昭和三年十一月に大連市久方町で生まれ、小学校は朝日小学校、次いで南山麓小学校で三年生の一学期まで学んだ。小学校にあがる前ごろ、月に数度帰宅する父から、土産話に帰順させた馬賊の話をししばしば聞かされた。

そして、そのうちの一人に、大連埠頭で父と共に会
いたことがある。

その人の名は王殿忠といい、満軍の偉い人だった。
私をわが子のように抱きあげてかわいがってくれた。
後で父から、私と同じ年の息子がいたが、事故で死亡
された旨、聞かされた。

私が中学を卒業して、満州国の国立大学哈爾濱学院
に進学する直前、父の話によれば、王氏は既に上將と
なって、満州国軍の第八軍司令官をしている由であっ
た。そして、そのとき初めて王氏が帰順するとき、
父と交わした義兄弟の縁を結ぶ血書を、見せてもらっ
た。学院入学後にもらった父からの手紙によると、そ
の後、王氏は、満州国皇帝の侍従武官長として転任し
た由であったが、最後は、皇帝と運命を共にしたのか
処刑されたのか、消息不明のままである。

満州国建国後、父にも、東満三省の顧問や満軍の要
職への勧誘があったが、なぜか公職への一切の誘いを
固辞し、北鮮の羅南に居住していた親戚を頼り、隠棲
することとなった。

(一) 羅南への移住と哈爾濱学院への進学

私たち家族（母、姉、兄三人と私）も、中学生だっ
た上の兄二人を大連市に残し、昭和十二年七月、北鮮
の咸鏡北道清津府羅南へ父と共に移住することになっ
た。

西欧的な近代都市大連に比べ、本当に静かな緑に囲
まれた羅南の街は、帝国陸軍第十九師団主力及び咸鏡
北道道庁の所在地とは思えないほど、平和な片田舎の
街だった。羅南における父は、しばらくは悠々自適な
生活をしていたが、まだ五十前の若さを持って余し、頼
まれて道庁の嘱託（福祉担当）や独津の漁業組合の理
事をしたり、後年、別府郊外の割烹旅館の次男坊とし
て生まれてきたので、見様見真似で覚えた包丁さばき
を使用人たちに教え、羅南高等女学校、次いで羅南中
学の寄宿舎の賄いを請負ったりしていた。更に余暇に
は別府の美術学校で習った日本画をたしなむ初老の諦
観の域に達していた。

父は自分の果たせなかつた夢を息子に託すつもりか、
父の強力な勧めで、私は昭和二十年の春、羅南中学校

四年卒業後、前述のとおり満州国国立大学哈爾濱学院に進学し、ひたすら、ロシア語の勉強に専念していたが、同年七月上旬、軽度のTB（右肺炎浸潤）と診断され、約一カ月の予定で羅南の父母の元に帰省、療養することとなった。

帰省後、掛かり付けの医師に診てもらったところ大した病気ではなく、栄養をとって、ブラブラしていればすぐ元気になると言われ、私と同病で、京城薬専から帰省中の中学の同期生福島君と共に、油坂の海岸近くにあった朝鮮人の小学校に、臨時教員として手伝ったりしていた。やがて体調も回復したので、そろそろ復学しなければ、と考えていた矢先、突如としてソ連軍による侵攻が開始されたのである。時に昭和二十年八月九日であった。

二、ソ連軍の侵攻から北鮮脱出まで

(一) 戦火からの避難と終戦

第十九師団による反撃を期待していたが、主力を南方に移駐させた留守部隊だけだったようで、その力はなく、現地召集の第二国民兵を主体とした隊力で、必

死の抵抗を試みたが、羅津から清津に至る海岸線上の侵攻を防ぎ得なかったようである。

侵攻と同時に、ラジオ放送も途絶え、隣組経由の情報配布もなく、戦火からの避難誘導の指示も一切なく、聞こえるのは艦砲射撃の音と、見えるのは、夜間の空を焦がす遠い戦火のみであった。それと口コミによる噂のみで、情勢を判断せざるを得なかった。

当時、「このままでは、間もなく日本は負ける」との哈爾濱学院の入学式での院長訓示、また近傍の朝鮮人たちの挙動不審な集まり、敗戦の噂話など、今更ながらしみじみと思い返している。

昭和二十年八月十日から十一日にかけて、南に避難する日本人を乗せた列車が、何本か羅南駅を出発、または、通過していくのを見ていたが、ちょうど近くに嫁いでいた姉が腹膜炎を起こし、病床にあったため、動かすことができず、心ならずも、そのまま羅南に残留することとなった。この間に軍官舎の家族及び道庁官舎の家族は、軍と共に南方にはなく、北方の山岳地帯（古茂山方角）に向かって避難し、その他の残留

日本人たちもそれぞれ思い思いの方角へ、散り散りに避難していったようである。気が付いたときは、私たち一家六人（父・母・姉婿・姉・姪と私）と同様に、動きの取れない年寄りや病人を抱えた日本人だけが、取り残されたような感じだった。脱出直前の福島君と、十八歳以上の動員に應じるため、軍事部へ駆け付ける伊東君に会ったのが、羅南における中学時代の同期生の最期の別れとなった。

十三日になって、いよいよ上陸したソ連軍が突入してくる、との噂を近くの朝鮮人たちから聞き、大八車に姉と姪（当時三歳）を乗せ、我が家も南下せざるを得なくなった。その日は羅南の市街地を通り抜け、南端の丘の上にあった護国神社まで避難するのが精いっぱいであった。

翌十四日は、早朝からソ連機（旧式複葉機）による十九師団兵舎への爆撃が、連続的に行われたため危険となり、再び南下を開始し、途中、鏡城の河原で野宿した夜、朱乙の奥の温泉地までたどり着いたのが、十五日の夜であった。そこにはロシア革命のとき、ソ連

から亡命してきたヤンコフスキー伯爵一家の家があり、同家の使用人から、片言のロシア語で情報を集めようとしたが、彼らも、ソ連軍の侵攻に関しては何も知らず、困っている状態だった。ここでも在住していた日本人は一人もおらず、皆それぞれ南下、又は西方の山の中に避難して行った旨、そのロシア人が話していた。

二、三日そこで様子を窺っていたが、新しい情報は一切入らないので、取りあえず、南方の金田温泉まで南下したが、ここでも在住の日本人は一人もおらず、空き家となった温泉旅館に入り、しばらく様子を見ることにした。そこへ、日本軍の将校がオートバイで訪れ、終戦を知らせてくれたのが、十八日ごろだったと思う。そして旧居住地へいったん帰り、当局の指示を待てとのことだったので、再び、姉と姪と荷物を大八車に乗せ、羅南を目指して北上することとなった。

この無責任な将校の勧告に従ったことが、悲劇の始まりであった。途中、鏡城の峠で初めてソ連軍の第一線部隊と接触し、隠し持っていた日本刀二振りと拳銃一挺を没収されたが、北上は許された。その後、ソ

連軍の部隊に遭うたびに、荷物と身体検査が行われ、その都度、めぼしい財産（貴金属や時計）は没収され、やっとの思いで羅南の自宅に着いたら、元の使用人の朝鮮人一家が、既に住んでいたもので、取りあえず、近くの日本人の空き家に入り、当局の指示を待つことにした。元の使用人が気の毒がり、私たちの残していた食糧や衣類を掻き集め、差し入れてくれた。

夜間になると、酒に酔ったソ連兵が侵入してきたり、周囲の朝鮮人の様子も不穩に見え始め、指示を出す当局も見当たらず、不安に思っていたところ、清津から日本へ向けて引揚船が出る、との噂を近くの朝鮮人から聞き、再び大八車を挽き、清津港へ向かって羅南を出発したのが、八月の下旬ごろだったと思う。しかし、この噂は、私たちを追い出すための偽情報だったようである。

(二) 清津埠頭においてソ連軍による逮捕

途中、羅南の外れにあった旧軍隊の演習場でソ連軍の検問に遭い、雨中の演習場に一晚足留めされた。翌朝釈放されたが、たまたま近くをソ連兵に引率され、

通って行った日本軍の兵士の列の中に、羅南中学校の恩師（熊野御堂先生）がおられ、お互いの健闘を祈り、お別れの言葉を交わしたのが、その後、消息不明となった同先生の姿を見た最期となってしまった。

清津まで無事たどり着いたが、ちょうど清津埠頭の前で再びソ連軍の検問に遭い、今度は父・義兄・私たち男三人が有無を言わず逮捕され、清津刑務所に収監されてしまった。同刑務所には、日本人の男性ばかり約二、三百人が収容されていた。食糧は生大豆と水だけで、しかも三疊ぐらいの独房に十五人ぐらい詰め込まれ、このままでは死ぬのではないか、と思っていた。

一週間ぐらい過ぎたころ、朱乙に亡命していたヤンコフスキー伯爵の息子と称する者が、ソ連軍の将校と共に来訪し、一人ずつ尋問し、旧軍人と思われる者以外は釈放されることとなった。父と私は釈放されたが、義兄は三十代のため、道庁職員であることを主張し、私たちも支援したが認められず、引き続き拘留されてしまった。

その一週間後ぐらいに義兄たちも釈放されたようであるが、ついに、現在まで行方不明のままである。父と私は、清津埠頭前で別れた母たちを探すため、再び羅南まで戻り、逆に清津に向けて日本人がおりそうな所を次々と訪れ、最後に、清津の西端の丘の上にあつた元の日本窒素の社宅で、やっと再会したのは、釈放後、五日目ぐらいであつたと思う。途中、羅南でお世話になつていた山田病院の院長一家の自殺を聞き、病院の前で、ご冥福をお祈りしたのもこの時であつた。

清津では、ソ連軍の清津地区警備司令官と称するスミルノフ大佐が、しばしば私たちの住んでいた、元日本窒素の社宅地区を巡視のため訪れ、私が、哈爾濱学院で習つたロシア語で、とつとつと話しているうちに親しくなり、時々、米や塩漬けの鰯を、我々日本人に配給してくれた。また、内地への引揚船の計画は、今のところない旨語ってくれた。

(三) 北鮮保安隊による拷問と南方への脱出

ある晩、裏の小学校の校舎が、不審火で全焼した。その翌日、北鮮保安隊の約一個小隊が私の元に来て、

放火犯容疑で逮捕する旨宣告し、彼らの本部へ連行された。身に全く覚えのないことなので、強く釈放を要求したが、一切受け付けてくれず、毎日殴る、蹴る、重たい石を膝の上に乗せての正座、逆さ吊りと水責めなど、拷問の数々を受け、自白を強要されたが、頑として受け入れなかつたところ、約一週間後、急に釈放された。後で保安隊員の一人がひそかに話してくれたところによれば、ロシア語を話す日本人がいると邪魔なので、放火犯としてデッチ上げ、消すつもりであつたが、私の行方不明を知つた前記のスミルノフ大佐が、手を回してきたので、やむを得ず、いったん保釈した由であつた。身の危険を感じた私は、できるだけ速やかに南方に脱出することを決意した。

その決行の日に、駅頭で、バツタリと顔見知りの保安隊員と会つたが、彼が本部に電話で報告している間に、動きだした列車に家族と共に飛び乗り、危うく難を逃れることができた。

(四) 南方への移動と三十八度線突破の挑戦

途中、何回か列車(貨車や客車)を乗り継ぎ、その

度に、ソ連兵や北鮮保安隊による略奪や暴行を受けながら、やっと五日目の夕方ごろ、三十八度線近くの江原道平康駅にたどり着いた。

ソ連兵の目当ては終始金目の物か、婦女暴行で、幸いにも、ウラジオストックで水商売をしていたという、多少ロシア語を話す老婆が何人かの同業の若い女性と共に同乗していたので、最悪の場合には一般の婦女子の盾となって守ってくれた。保安隊員による暴行は、三十六年間にわたる日本の支配に対する恨みを晴らすのが目的のようで、肉体労働をしていなかった日本人を、体格や手のひらで選別し、殴ったり、突き飛ばしたりして暴行を加えていた。父も私も、手のひらが白過ぎるといって殴られた。

平康駅からは徒歩で南下し、暗夜を利用して三十八度線の突破に挑戦したが、まるで待ち構えていたように、国境警備の保安隊員に発見され、ソ連兵の自動小銃で乱射された。身の軽い男だけなら、地形地物を利用しながら逃げることも可能だったかもしれないが、なにしろ、女・子供連れのため降伏せざるを得なかつ

た。早速近くの警備本部に連行され、旧日本軍から復員したと称する保安隊員により一晩中取調べと暴行を受けた挙げ句、再び北方へ送り返されることになった。このまま清津まで戻れば、保釈中の逃亡犯として再び逮捕されることは明らかであったので、途中、まず元山駅で列車からの脱出を計ったが、駅構内の警戒が厳重で、かつ昼間だったため、果たせなかつた。元山駅でも取り調べの保安隊員に、うかつにも内地へ帰りたいと言ったばかりに、「内地とはなんだ……」と殴る、蹴るの暴行を受けた。

次の比較的大きな町で、日本人が大勢おりそうな町は咸興であったので、今度こそ是が非でも脱出を計るべく決意していた。咸興でも日本人のこれ以上の流入を阻止するため、厳重な警戒を行っていたが、夜闇に紛れ何とか町に潜入することができた。取りあえず中心街とは反対の方角へ行くと、咸興神社らしいものが見えたので、早速、本殿にひそみ、二、三日様子を見ることにした。ここでも、毎晩のように酔っ払ったソ連兵が侵入してきたが、シベリア出兵仕込みの父と、

ハルビンにわか仕込みの私の下手なロシア語で、なんとか、その都度追いついてきた。しかし、迫り来る寒波と飢えに耐えきれず、日本人避難民が大勢収容されていた町の中心部にあるお寺に、移動することにした。ちょうど、昭和二十年十一月の初めごろのことであった。

(4) 避難民の救済活動

そこでバッタリ合ったのが、哈爾濱学院の一期先輩の田谷榮近氏であった。在校中は言葉を交わしたこともなかった先輩から「篇末ではないか」と声をかけられたときは、正に地獄で仏に会ったような気持ちであった。田谷氏も脚気のため、三カ月間の予定で北鮮の叔父の家に帰省、療養中のところ終戦となり、咸興では、既に日本人世話会の通訳として、大変貴重な存在になっていた。同氏は早速、私を終戦まで咸興医学専門学校があった（元の済恵病院）跡に設けられた日本人世話会と、ソ連軍による共同運営での日本人避難民のための伝染病院の通訳として送り込んでくれた。同氏は日本人世話会の通訳のほか、主に病院長ペトロ

フ少佐の通訳として病院の運営のため、病院長と共に東奔西走されていた。私は、主として副院長ベーレンス少佐の通訳として、主に診療業務を担当することになった。総計四百床程度の病院であったが、最盛期には直接マットを床に敷くことにより、千床近くの収容能力を有していた。

当時、咸興及びその周辺地域には、約二万五千人（内半数以上は戦後北方からの流入者）の日本人が避難生活をしてきたが、飢餓と寒さと不潔な生活のため、発疹チフスが蔓延し、毎日八十人近くの日本人が倒れていくのを見るに見かねたソ連軍が、自分らの野戦病院の一つを提供し、この病院を開設したのであった。

この病院は、ソ連軍の軍医六・七人と兵士約三十人のほか、日本側は、日本人医師、看護婦、その他の従業員合わせて四、五十人で編成されていた。それからの毎日、ソ連軍医の街頭巡回検診や患者の収容・治療の際に、通訳として同行したが、何しろ三カ月の教育で得たロシア語の知識しかない私にとって、満足な通訳などできるはずがなかった。まして医療分野の用語

など何一つ知らないのが当然であったが、「北鮮で少しでもロシア語が話せるのは我々以外いないのだ」との田谷氏の叱咤激励により、一生懸命、身振り手振りを交えての奮闘だった。

どうやら、仕事にも慣れてきたので、それまでお寺に置いてもらっていた家族を、病院の付属宿舎に引き取る準備をしていた矢先、終戦以来家族を守り、ややもすれば自暴自棄になる私を諭し、支えてくれた父が、くしくも私の誕生日である十一月二十六日に、枯木が倒れるように他界してしまった。もともと外地で骨を埋めるつもりでいた父なので、本望だったかもしれないが、一家の中心を失った私は茫然自失し、我に返るまで数日を要した。

しかし、続発する患者の収容に追われ、悲しみを押し隠し、通訳業務に専念した。私にとって唯一の心の支えは、自分の仕事で直接同胞の命を救うのだ、という自負心だった。私のつたないロシア語が一人でも多くの同胞の命を救えるのであれば、本望だと思ふ気持ちでいっぱいであった。そして哈爾濱学院の精神であ

る自治三訣（要旨は人のお世話になるな、人のお世話をしよう、報いを求めるな）を実践する絶好の場であった。

昭和二十年八月から二十一年三月までの、咸興周辺の日本人の死亡率は、全体の約三六パーセントで九千人近くに達していた。収容施設が劣悪だった富坪・五老地区の死亡率は、五〇パーセント近くにも及んでいた。病院の従業員にも犠牲者が続出した。ソ連側も病院長のベトロフ少佐及びキーエフ大学の学生であったミーチン軍医中尉の二人が羅病し死亡した。

病院長で内科医のベトロフ少佐は生粋の共産党員であったが、思想、人種を超越した人道主義者で、咸興地区における発疹チフスの撲滅のため正に命をかけて闘ってくれた人である。病院開設当初は、やや強引な手法で、物資の調達や人集めを行ったため、ソ連軍の上級司令部から大分睨まれていたようであるが、日本人にとっては、正に神か仏のような人で、部下に対しても一兵士に至るまで、それまで見てきたソ連兵と違い規律厳正で、病院長を中心に一丸となって使命達成

のため、死力を尽くした人たちであった。

田谷氏も私もほとんど同じ時期に羅病し、発疹チフスと再帰熱を併発し、約一週間、四〇度以上の高熱に見舞われ、危うく命を落とすところであった。発疹チフスに一度かかると、免疫ができるが、最初の羅病時には、カンフル、リンゲル、ブドウ糖、ビタミン剤などにより体力の温存をはかり、高熱の期間が過ぎるまで、じっと我慢して待つしか手段のない病気である。それと感染媒体であるシラミを熱消毒により、徹底的に撲滅することが肝要である。ペトロフ少佐の迅速で、勇猛果敢で、適切な処置により、あれほど猛威をふるった発疹チフスも、昭和二十一年の正月以降はみるみるうちに患者数が減少していった。しかし、当のご本人が犠牲者になるとは、だれも予測していなかっただけに、少佐の死を知らされた関係者の悲しみは大きかった。

（六） 集団脱出計画の展開

一冬目を迎えると、ほとんど全滅するのではないかとの危機感を抱いた日本人世話会では、昭和二十一年

の春以来、執拗な嘆願と長老たちの必死の工作により、ソ連軍司令部及び北鮮当局の説得と籠絡に努め、ひと冬目は、生き残った日本人避難民を陸路又は海路で、日本に向かって送り出す計画を展開していたのである。

北鮮当局との折衝には、労働運動のため長い間日本統治下の刑務所に、拘留されていた磯谷氏や松村氏の労働運動中の人脈を利用した工作が功を奏し、ソ連軍司令部との折衝には田谷氏の語学力及び折衝能力により着々と進展しつつあった。そのような緊要な時にもかかわらず、昭和二十一年夏のある日、突然、その肝腎の田谷氏が、徴用されていた日本人技術者の早期帰国について、交渉中の通訳の最中に逮捕され、咸興刑務所に拘留されてしまった。

通訳を失った世話会では、早速私をピンチヒッターとして起用し、それからの毎日、世話会の役員とソ連軍司令部への日参が、始まったわけである。

その最初の日、私が、会長の話を軍司令官のスクーバ大佐に通訳している横で、ソファーに座っていた白髪の大佐のソ連軍の大佐が、会長の話をスクーバ大佐に、逐

次、同時通訳しているのに気付き、不審に思ったが、後で同行者の一人が、あの男は終戦前、道立病院で守衛をしていた男に似ていると聞き、初めて納得した。つまり私の通訳を点検していたわけである。ひょっとすると田谷氏の逮捕にも関係があったのではないかと一瞬思った。田谷氏のような名通訳でない私は、ひたすら窮状を訴えるとともに伝染病蔓延の危機性を、誇大に吹き込むことに専念したのである。

丸裸で伝染病菌を撒き散らしている日本人避難民は、ソ連軍にとっても、北鮮当局にとっても、早く日本に追い返したい厄介者であったが、政府間の話し合いがつかないため、手の打ちようがない状態であった。その彼らの心情をうまく利用し、三十八度線は自力で突破するので、その近くまでの貨車による集団移動を許可、又は黙認するよう、強く訴えたのである。春以来の世話会の努力が実を結び、ついに、当局は黙認すること、貨車の使用を許可することを言い渡してきた。

早速、あらかじめ設定し、ひそかに既に使用していた次の①咸興―本山―鉄原―京城ルート（内陸ルート）、

②咸興―元山―襄陽―注文津ルート（日本海沿岸ルート）、③咸興―興南―海路―注文津ルート（海上ルート）の三つのルートを使用しての、数百人単位の集団脱出計画が、直ちに、半ば公然と展開され、残留希望の数百人を除き、その年の秋までに計画を終了することができた。その計画の主要な人物であった田谷氏を拘留中のまま置き去りにすることは、断腸の思いであったが、世話会の閉鎖に伴い、やむを得ず、会長や役員の人たちと共に、私も最後の便で、海路日本海を百人乗りぐらいの小さな帆船で南鮮へ脱出し、半島を横断の後、仁川経由で帰国したのが昭和二十一年の十一月であった。

注文津から真っすぐ、日本へ帰国できるものと思っていたら、注文津の米軍キャンプでは、私たちの情報を既に入手していて、到着するや否や、米軍の飛行機で、世話会の会長、幹事と私の三人を龍山に在った米軍の第八軍司令部の情報部（G2）に連行していった。そこで約一週間にわたり尋問を受けたが、実際は北鮮のソ連軍に関する情報が狙いであったようである。挙

げ句の果てに、今度は米軍の情報部員として残るよう要請されたが、断固としてお断りした。もし残っていたら、朝鮮戦争に巻き込まれ、二度と日本へは帰れない身になっていたかもしれない。

日本政府が初めて引揚船を北鮮に派遣したのは、更に翌年の二十二年のことで、釈放された田谷氏も、この便で帰国された。

(七) 外務大臣表彰状

昭和四十七年、実に二十七年ぶりに、当時の避難民救済活動の功績に対する外務大臣表彰状が回り回って任地の旭川へ送付されてきた。たまたま、避難途中の若き十代のハル濱学院生二人の北鮮における活躍ぶりを聞いた外務省が、遅まきながら、福田赳夫外相名義の表彰状を発行した由であった。主役はあくまでも田谷氏で、協役で余りお役に立たなかった私など、先輩の付録でもらったようなものである。一片の紙切れであったが、数奇な自分の青春時代の一ページを思い起こさせてくれた。

そして今でも、田谷氏を中心に、前述の磯谷氏を

じめ、ボランティアで活躍していた医師や医専の学生、看護婦見習いの女学生らや、入院していた人たち並びに、戦後の北鮮で苦勞して引き揚げてこられたその他の人たちも含めて、「済患会」と称する仲間の会を、年に一度開催し、当時を偲び亡くなった人たちの御冥福を祈っている。

三、その後の生きざま

昭和二十五年六月、海の彼方に再び火の手が上がり、マッカーサーの命により警察予備隊が創設された。政府と軍との庇護を失った外地の同胞がいかに悲惨な目にあつたかを、つぶさに経験した私は、再び同胞を戦火にさらしたくない一心で入隊した。また旧軍に染まっていない若い我々が中心となって、新しい国防組織を作らねばならないという自負心で入隊したが、当時の私の偽らざる心境であった。

ソ連軍の侵攻以来、戦火からの避難、ソ連軍による逮捕、刑務所生活、義兄との生別、北鮮保安隊による拘留・拷問・南方への脱出、三十八度線突破への挑戦・失敗、乞食のような流浪の旅、父の死亡、避難民の救

済活動、ソ連軍との折衝、集団脱出、南鮮經由の帰国等々、それまで考えてもみなかった過酷な数々の経験をも、わずか一年半有余の間に、しかも十六〜十七歳と言う最も多感な時期に経験した私は、だれよりも戦争を嫌い、平和を愛する人間になっていた。しかし同時に、他国の侵害により自由を失うことの方がもっとも嫌いな人間にもなっていたわけである。地球上に戦火の火種が尽きない限り、嫌でも自分の国は自分で守らなければならないことを痛感していた。警察予備隊に入隊してきた、かつての職業軍人の人たちは、優秀で民主的な人たちから、選抜されて入隊してきたので、警察予備隊から保安隊へ、更に自衛隊へと健全に発展し、私の入隊時の心配は杞憂に終わった。もちろん、この間における国民の厳しい批判や監視の目が、また良い意味でのシビリアン・コントロールが有効に機能していたことは事実である。

昭和五十七年の定年退官までの三十二年間、部隊は第一線の部隊から師団・方面隊まで、司令部は師団から方面総監部・陸上幕僚監部・統合幕僚会議事務局ま

で、全国を転々として勤務した。おまけに最後は防衛施設庁まで勤務した。災害派遣（水害、雪害、地震、火災、人命救助等々）も幾度となく経験し、昭和五十一年のソ連空軍ベレンコ中尉による函館のMIG-15の不法侵入にも直面した。大過なく務めあげた、といいたいところだが、生来、反骨精神が旺盛なため大過だらけで、懲戒処分も二回受けたが、いずれも個人の非行ではなく、管理上の責任罰であったので勲章の一つと考えている。そして特筆すべきことは、指揮官として勤務した際、ほとんどの部隊での統率方針に、哈爾濱学院精神の自治三訣を取り入れて成功したことである。

退官後は、NECグループの一企業で十一年間、社員教員に携わり、満六十五歳を契機に退職し、爾來、無為徒食の生活を送っている。この間、還暦の直後に喉頭癌（声帯上の扁平表皮癌）を患ったが、幸い早期発見のため声帯を切除せずに、顕微鏡手術と放射線治療（コバルト照射）だけで克服することができた。お陰でなんとか声を失うことなく、相変わらず毒舌を吐

き散らしながら生きています。

そして戦争と平和の時代「昭和」を精いっぱい生き
た私は、わが人生に悔いはなく、もはやこの世に何の
未練もないが、ただ一つ、もし可能ならば、戦後の北
鮮で非業の死を遂げられた方々の御供養を現地で行い
たいと願っている。

【執筆者の横顔】

崑末稔氏は五人兄弟（四男一女）の末っ子である。

昭和二十年八月ソ連軍の北鮮侵攻時、三人の兄たちは
既に兵役に服し不在であった。幸か不幸か、崑末氏一
家の脱出・引揚げは、近在の実姉の家族も含めて、当
時療養帰省中で、本来なら両親の愛を一身に受けるべ
き十六歳の末っ子の崑末氏の双肩に懸かる運命となっ
た。兵役の近い昭和二、三年生まれの少年は、大人た
ちの都合次第で、大人にされたり、子供扱いだったり
の半端者ではかの年代の者には分からない苦勞が多かつ
た。

しかし、一先輩との奇遇で、崑末氏は豁然と悟り、

未熟ながら身につけたロシア語を駆使して、居留地域
の全日本人のために尽力することに使命感を見いだす
この時点で、十六歳の少年は見事に『成人』したと見
る。爾後、あらゆる苦難に対し積極果断に行動する。
また敵のソ連將兵にも温かい人間愛を感じ、暴力や
詭計を働いた朝鮮人たちにも、過去の日本の罪業を思
い耐え抜く。不条理な状況での南鮮への脱出行、米軍
尋問に際しての南北情勢判断など、ここに崑末氏の大
きな精神的成長を我々はいま見る。

帰国後、自衛官の道を選んだのは、崑末氏の近代史
観と在鮮時代に培われた国際感覚に起因する。自衛隊
で通信系統を歩み続けたことはコンピュータ全盛の当
今、やはり先見の明と云うべきであろう。また崑末氏
は俗に言う生え抜きの《叩き上げ》で、一等陸佐にま
で昇進した。異例中の異例で、今でも隊内の語り草で
ある。満州国立大学ハルビン学院では短い在籍であつ
たが、《学院三訣》の『人のお世話にならぬよう、人
のお世話をするよう、そしてむくいをもとめぬよう』
を座右の銘として率先範を垂れた賜物であろう。

不幸にも五年前、喉頭癌に侵されたが、持ち前の敢闘精神で克服し、現在は健康に留意しつつ、悠々自適の日々である。嵐末氏のような先見の士こそ日本の前途をいつまでも見守っていただきたいと願うものである。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正